葬儀、他界、生靈に就ての思想、人間の死後に於ける靈魂の狀態、精靈、物・植物及び動物と精靈との結合、疾病・死及びあらゆる不運の根源

の諸項より成り、「シャーマン」の章は

シャーマンの個人的資格、家族シャーマンの資格、シャーマンの心理、シャーマン界に於ける女性の地位、シャーマンの資格と修行、若きシャーマンの允可、シャーマンの衣裳、シャーマンの裝束の意義、シャーマンの種類、變性シャーマン、シャーマンの職能、シャーマンの所作及び詩作、シャーマンの自信とその力に對する信念、民族に於けるシャーマンの地位とその葬式。

の諸項を含んでゐる。圖版・挿圖も可成豐富であり、貴重なものも含まれ、本文をよく補つてゐる。シベリヤのシャーマン教に關する文獻は極めて多いが、就中、長期に亘りシャーマン教徒の間に生活する機會をもちシャーマン教に就いて透徹した探求を行つたロシヤ人學徒の研究を以て筆頭に推さねばならぬ。かゝる研究の成果を可成の程度に驅使したことに一應本書のよさを認めねばならない。とはいふものの、本書の内容は常に正確なるを保し難いのであり、シャーマンの原義に關するpoppeの批判は姑く措くとしても（Asia Major. III. 1926）、ニオラツツェがシャーマンに三類の發展段階——個人的シャーマン・家族的シャーマン・職業的シャーマン——を設定したのに對しては、Augustinを始めとして（Anthropos. Bd XXII. Ht. 3. 4. 1927）赤松智城博士（宗教研究新六ノ三所載北方民族の巫術の起源について・滿蒙の民族と宗教總說）・棚瀨襄爾氏（民族宗教の研究第一部第四章）の批判のある所であつて、かゝる段階發展說は到底是認され得ないのである。斯の如く本書は必しも瑕瑾なしとは言ひ得ないのであるけれども、一般讀書界にシベリヤシャーマン教の概要を與へるためには恰好のものであり、その意味に於いて推奬さるべきであらう。秋葉隆教授の序文に見える如く、同じくポーランド人にしてシベリヤシャーマン教研究に進んだCzaplika女史の著作が比較的早くから本邦學界に知られてゐるのに對して、本書はそれ程には讀まれてゐないやうである。この缺陷を補ふものとして牧野氏の邦譯刊行は意義付けられるのであり、入門書としての本書の價値は十分活用さるべきであらう。なほ、卷末の文獻表はロシヤ文獻を數多く擧げて居り、目錄として重寶なものである。〔岡崎精郎〕

支那旅行日記

上卷　リヒトホーフエン著
海老原正雄譯
昭和十八年五月　慶應書房發行
A5判四二二頁　定價五圓貳拾錢

本書はリヒトホーフエンの死後、彼が支那で行つた一八六八年以降足掛五年の地質學的踏査の際の日記を更に原稿や手紙によつて補綴して編輯刊行せられた"Jagebücher aus China"（hg. V. C. Jcessen, I Bände, 1907）の全譯本中の第一册である。

本書はリヒトホーフェンが、支那研究に身を捧げようと決意してサンフランシスコを出發した一八六八年の八月より始まつてゐる。

〔支那への航海と彼の立場〕――「八月三日正午船は錨を揚げた。カリフォルニヤに左樣ならを告げた私の心は輕かつた。といふのは、目的のない仕事を數年間して來た後、遂に又何か大きな事を成し遂げる機會が私の眼の前に現れてゐたからである。」と、目的のない仕事云々といふのはそれより八年前の一八六〇年五月に支那日本及び暹羅との通商條約を締結するためのプロシヤの使節團に參加して故國を去つた二十七歳の地質學者リヒトホーフェンが、アジア外緣の若干の旅行の後、アメリカ合衆國に渡り主としてシエラ・ネヴアダを研究對象として過した七ケ年の歳月と、必ずしも成功とは言ひ得なかつた其の成果とを指すものである。そこで「こんなに長い間故國を留守にした以上、豐かな研究成果なしには歸國すべきでないといふ責任を、政府と專門仲間と自分自身とに對して感ずる」に至つた彼は「世界中でどの地域の地質學的研究が最大の成功を約束せられてゐるか」を改めて檢討し、「支那帝國を地質學的に測量する計畫を思ひ付き、」カリフォルニヤ銀行（後に上海商業會議所）より研究資金の補助を得て「數年間これに全力を擧げて沒頭する決意を固めた」のであつた。それ故に此の旅行に於ける彼の立場は、二重の目的「本質的には科學的性質（＝地質調査）のものであつたが、同時に又實際的方面（＝祖國への寄與と出資者の營利）とも關聯」をもつものであつた。かくて、彼のアメリカへの別離には些かの哀惜も含まれず、運命の開拓への希望に滿ちた意氣込のみが窺へるのである。さうして彼はおほむね平穩な航海の後、明治元年八月二十六日、政狀遽しき日本（＝横濱）に上陸した。萬延元年（一八六〇年）の訪問後の再遊である。日本に於て彼は、政狀に關しては「不可解」を、景觀に就ては「優美な魅力」を、住民に對しては「好感」を感じつゝ海路長崎に出で、上海に向つた。〔北京への旅・旅行計畫〕――九月五日、上海に降り立つた彼は「支那に關する文獻に通曉する機會がなかつたゝめ個人でこの巨大な國を踏査するといふ無謀な企て」の前に一瞬當惑して立ちつくした。けれどもそれはほんの一瞬であつた。彼は先づ北京に於て支那政府に此の計畫に興味を持たせる事によつて政府の保護と援助とを期待し、且つ又、旅行計畫を樹てるに充分な情報を得る爲めに、到着後數日にして上海を出發した。併し乍ら、北京で見出したものは、僅かに總理衙門發行に係る一葉の旅行證明書のみであつた。そこで彼は、彼の旅行の二つの目的――科學的並びに實際的目的を同時に滿足せしめる樣な旅行計畫を思ひ付いた。それは「石炭層」を中心とする踏査、卽ち、パムペリー等の集錄した石炭產出地點に就ての報告を手掛りとして「石炭層」を探り、その「石炭層」を中心として見たる其の地方の地質構造を研究すると同時に、その「石炭層」の利用價値を檢討する事であつた。かくて上海への歸途に就いた彼は、其の途次、早くも芝罘で登州へ

の地質學的小踏査を決行してゐる。〔最初の地質學的踏査、〔浙江・江蘇〕――寧波附近を訪れ、更に舟山列島横斷を企て、それから支那平野南端部に擴がる運河網を經て杭州府・太湖・鎭江・南京を訪ひ上海に歸着した。此の旅行は「支那的なものと支那語の初歩を知る爲めに」行はれたものであつたが、相當な地質學的資料が齎された。就中舟山列島に就ては、後に日清戰爭の際、彼はその獲得を政府へ建策してゐる。〔第二回旅行、揚子江下流地方〕――上海・漢口間を小艇によつて往復した揚子江沿岸の調査旅行であつた。此の旅行に於て、彼は殆ど終始暴風に惱まされたが、而も猶「支那に於ける眞の石炭系の存在を初めて確認し、」これに續く古い一連の地層を觀察し、江岸の地質構造の一般圖を作製し、更に彼の名を不朽ならしめた研究の一つたる「黃土」に就ての最初の觀察を行つて居る。そして又その後の彼の旅行をして「眞に成果あらしめた、」支那語に堪能にして忠實なる隨行者、ベルギー人バウル＝スプリンゲルトを得たのも此の旅行に於てゞあつた。〔第三回旅行、〔山東・南滿〕――沂州炭田と坊山縣の主要な炭田を中心として山東地方を踏査し、更に南滿洲を巡行、營口――復州――五湖嘴――貔子窩――大孤山――高麗門――鳳凰城――寨馬集――本溪湖――奉天――錦州――山海關――北京といふ興味深いコースを辿つた。彼の山東半島に對する特別の關心は、此の旅行に於て萠芽し三十年後にドイツの膠州灣占領となつて結實したのであつた。本課書は此處で終つてゐるのであるが、彼は引續き〔第四回〕は江西より浙江へ、〔第五回〕は廣東・湖南・湖北・河南・山西・直隸の諸省を〔第六回〕は浙江・安徽兩省の山岳地帶を〔第七回〕は直隸・蒙古・山西・陝西・四川・湖北の諸省を跋渉した。これ等は中・下卷に盛られて、此の十一月頃には刊行を見る豫定の由である。

以上が本書の梗概であるが、若し萬一にも、「旅行日記」なる表題よりして、所謂名所舊蹟探訪記的な紀行を期待せられる向きがあるとしたならば、それは飛んだ見當違ひであらう。彼の目的は飽迄も地質學的研究にあつたのであるから。併し乍ら「鼻に大きな眼鏡を掛け漢字辭典に沒入してゐる丈けで、自分自身を偉いと思ひ込んでゐる單なる博識の機械」の手合たる、士大夫的教養の持主連中のものせる、所謂名所舊蹟探訪記的な紀行からは決して期待し得られぬであらう樣な優れた觀察の數々例へば南支那の人口の驚異的な稠密さとか、支那農業の一面性とその端的な集約的經營狀態とか、植物の人爲的根絶に關する考察とか、豐饒なる土地に於ける農民の貧困なる現象への疑惑とか、南北支那の對蹠的な特徵とか、支那史の停滯性とか、ヂエスイット教團の傳道の成功の由緣とか、等々と云つたより本質的な問題を斷片的にではあるが、優れた科學的精神と「靜かに而も泰然たる愼重さを以て、支那の群集の中を搔き分けて行つた、」不屈の實踐とを通じて、我々の前に提起してくれてゐる。更に又、我々にとつて直接的に興味ある問題は、西歐諸國の支那に對する帝國主義的侵略の最初の觸手としての本書自體の歷

史的意義であり、更には又、世界史的關聯の中に支那を把握せんとする時、支那の類型化を將來せしものが、その歴史と共に歴史的基體としての自然であるとするならば、本書を含めてのリヒトホーフェンの總ての勞作は皆、我々にとつて好個の資料たるを失はぬであらう。

リヒトホーフェンの著作は、最近まで稀覯書に屬し、爲めに我國に於ける彼及び彼の業蹟に關する知識は、歐人の支那研究に引用せられたる彼の勞作の斷片を繋ぎ合せて勝手に象どつた彼のシルエットに對する一人合點と云つた傾が强かつた。是に反して、本書は逆に彼を最も身近かに感じ、知りつくした人々、夫人と愛弟子との手になるものであるので、――本書を繙く程の者はみな、當然自分達同樣、彼を知つて居なければならない、と云つた、ほゝ笑む可き獨斷に貫かれてゐる樣だ。此の行違ひの補塡の爲めには、譯者の補足的な解說が旅行地圖の挿入などゝ共に必要であつたのだが、それが望み得られなかつた以上、最近飜譯刊行を見つゝある「支那」やヘディン著・高山洋吉譯「リヒトホーフェン傳」（昭十六・三、慶應書房）等を伴讀せらる可きであらう。此の紹介も亦、是等に負ふ所が多い事を附記する。〔眞島行雄〕

因みにこの譯書には、支那地名のローマナイズされたものを、そのまゝで漢字にもどしてないところがいくらもある。原書を見ないので何ともいへないが、綴りは原書ですでに誤つてゐるものもあらうし、印刷上の誤りもあらう。蛇足ながら二三氣のついたのをあげてみる。

P. 59 Yin kiong kiau 鄞江橋
P. 73 J.önn kiang 岬 (Jschönn kia) 沈家
P. 61 Liau föng tsze Siau—sze) 秀峰山
P. 165 King tsze schan 鏡子山
P. 235 Yukou (Yü ko·) 漁溝
P. 269 Siau 谷 (Hsiau fu) 孝婦河
P. 289 Hwangschan 黃山
P. 293 Ya kia kuan (— — kuan) 岳家圈
P. 422 Jöng Yun 豐潤